



古典は、過去の人々が積み重ねてきた知的活動の宝庫だ。19世紀末のドイツでは児童書出版の拡大と義務教育の普及によって、子どもたちも本に接する機会が増えた。しかし子どもたちは児童向けの通俗的な娯楽書を好みがちで、多くの大人たちも、子ども、とくに民衆層の子どもに古典は必要ないと考えていた。それに異議を唱え、子どもたちに古典を読もうとはたらきかけたのが、当時のドイツで広まった児童書運動だった。

児童書運動の主導的立場だった民衆学校（Volksschule、今の小学校から中学校くらいまでの年齢の子どもが通った）教員ハインリヒ・ヴォルガスト（Wolgast, Heinrich 1860-1920）は、当時よく読まれていた児童文学を批判し、古典や良質な文学作品を読むよう教育することを主張した。教員たちは書評紙「児童書の守護者（Jugendschriften-Warte）」を創刊し、そこでゲーテやシラーの詩などの古典のほか、グリムやアンデルセンのメルヒェンや地域の説話のような、長く受け継がれてきた物語を読むことを勧めた。メルヒェンや説話を含めた古典が作品とし



ヴォルガストが編纂したシリーズ本。小さくて子どもも手に取りやすい。第1巻はグリムのメルヒェン。

て優れており、読書の力を養う上でも有益だと考えていたからだ。さらに彼らは出版社と提携して安い児童書シリーズを出版し、良質な本を子どもが手にしやすい環境をつくらうとした。

しかし実際には、民衆層の子どもにとって、古典を「撫でる」ように、軽やかに慈しむように読むことは容易ではなかった。子どもたちが好んでいた通俗的な少年向けの冒険小説や少女向けの夢見がちな物語文学の方が、古典よりもわかりやすさや面白さの点ではなじみやすかった。しかしこれらの通俗物語では読書の力は育たないと教員たちは考えていた。冒険物語を読む少年たちは、登場人物の冒険の派手さに目を奪われてどんどん読み飛ばしてしまい、じっくり読まないの、判断力が育たない。少女文学を読む子どもたちは、あまりに現実からかけ離れた夢のような恋愛物語にうっとりしてしまい、現実感覚が養われない。これらの物語は実際に粗も多く、読書によって育成されるべき判断力や現実感覚などの能力を身につけるうえでかえって邪魔になると考えられていたのだ。

そこで教員たちは、なじみにくい古典文学作品を子どもたちが読んで楽しめるように、様々な工夫をした。たとえば、子どもの発達段階に合わせて読み、少しずつ古典に慣れ親しむことをめざした。まずは親が子どもに詩を読み聞かせたのち、子どもが自分でメルヒェンや説話から読み始め、その後、長い物語文学を読むことを勧めている。

ヴォルガストは、古典のなかでも子どもが自分で読めるものを選び出し、原文のまま読ませることを重視していた。芸術的能力をもった作者が書いた文章を直接楽しむことが大事だと考えていたので、子どもが読みやすくするための改作は良くないと思っていた。なぜなら、芸術的に優れた作品には独自のリズムがあり、そのリズムが子どもの理解を助けるからだ。子どもに分かりやすくするという善意の意図によるものであっても、改作はその文章のリズムを壊してしまう。ヴォルガストが編纂した『母と子どものための 古来の美しい子どもの詩集（Schöne alte Kinderreime für Mütter und Kinder）』をみると、子どもが親しみやすいリズムを大切にしていることがよくわかる。



『母と子どものための 古来の美しい子どもの詩集』。  
愛らしい天使の絵など、美しい挿絵も充実している。

それにしても、なぜ彼らは子どもたちに古典を読ませようとしたのだろうか。判断力や現実感覚を養うだけであれば、古典でなく同時代の作品でも十分可能ではないかと疑問を感じる人もいるかもしれない。その主な理由は、古典や彼らが薦めた文学作品が、優れたリズムのような形式とともに、自分たちの共有したい内容をもっているからだ。古典の持つ世界を「教養」として、世代や階級を超えて共有することに意味があると考えていたのだ。

では、私たちが共有する必要のある教養とは何か。ここでドイツを離れ、日本で子どものために書かれた詩である童謡を例に挙げてみよう。「ぞうさん」や「お正月」、「シャボン玉」など、私たちの多くが知っている童謡は、明治、大正時代以来、歌いつがれ、今や古典となりつつあるとっていいだろう。これらの詩は簡潔ながら、私たちの普段の生活や心のありようを共有する世界をあらわしている。歌ってみると、私たちは誰もが感じる日常の喜びを共感したり、ふとしたときに見つけた美しいものを思い出したり、文化的行為をともに味わったりすることができる。教養とは、なにも立派で難しいことを知っていることだけではなく、このように「私たちの世界」として理解し共有できるものでもある。優れた童謡や古典文学は、そうした教養となる世界をもっている。子どもが読み口ずさむことによって、作品世界を過去の人々から受け継ぎ、また次の世代につないでいくことができる。だからこそ、新しい世代としての子どもが古典を読むことの意義があるのだろうと思う。



古典というと、東アジアでは、経学や歴史、諸子の書、さらには詩や散文など文学の書で、現在まで読み継がれている書物がそれに当る。古典を重んじるのは、唐の太宗が「古を以て鑑と為す」を三鑑の一つにしたように、古を鑑とする考え方と深く結びついている。

さて、「古典を撫でる」とはどういうことなのか、と問われたときどう答えたらよいだろうか。古典を楽しむ者にとって、自分と古典との関係は、どのような関係なのか。故事成語に「尚友」という言葉があるので、これを手がかりに考えてみたい。

『徒然草』（第十三段）に、古典を読む楽しみについて次のように述べている。

ひとり、灯の下にて文をひろげ、見ぬ世の人を友とする、こよなう慰むわざなり。

この後に、『文選』、『白氏文集』、『老子』、『莊子』、日本の博士が書いたもの、それが古典として挙げられている。吉田兼好のこの文章は、『枕草子』（二百十一段）に触発されたものであるが、いずれも中国の『孟子』（万章下）の「尚友」を踏まえている。「尚」は上の意で、古にさかのぼって古人を友とするという意味である。孟子は弟子の万章を論して次のように言っている。

一郷の善士は斯ち一郷の善士を友とし、一國の善士は斯ち一國の善士を友とし、天下の善士は斯ち天下の善士を友とす。天下の善士を友とするを以て、未だ足らずと為し、又尚りて古の人を論ず。その詩を頌し、その書を読むも、その人を知らずして可ならんや。是を以て其の世を論ずるなり。是れ尚友なり。

古人の作った詩を吟じ、その著書を読んだだけではその人物のことはよくわからない。さらに遡って行ってその古人の活動した時代をよく知り、古人と一体になってその時代を生きてみ